

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈母へのおもいに関する作文〉

中高校生の部 最優秀賞

母の病気を味方に

光野中学校三年

はやし 林

さゆり

受賞の言葉

まさか受賞するとは思っていなかったの
で、驚きと喜びでいっぱいです。

ありがとうございます。

母は目に涙を浮かべて喜んでくれました。

母への思いを忘れず、これからも家族を
大切にしていきます。

私の母には誕生日が二回ある。一つ目は、みんな誰にもある「母のお腹から生まれた日」。そして二つ目は「母の二度目の人生が始まった日」である。

四年前の秋。私が小学五年生のとき、母は突然脳梗塞という病気になった。母は「少し頭が痛いから病院に行ってくるね」と言い家を出ていった。私はというと、軽く聞き流し、「うん。」とだけ言って、見ていたテレビに意識を戻した。母があんなに重い病気にかかっていたとも知らずに…。

そして八時間にもおよぶ大手術が行われた。私は、その時初めて母の病気の重さを知ったのだ。母は生きるか死ぬか、確率は五十%ずつだったのだ。私はあまりに突然のことで何が起こったのか理解できなかった。「死」というものがこんなに身近にあるなんて、考えたこともなかったからだ。私にはどうすることもできず、ただただ助かる事を祈るしかなかった。

手術は無事成功した。母は「生」と「死」の分かれ道に立ち、茨に囲まれた、「生」への道を切り開いたのである。

手術が成功しても、母は人工呼吸器をつけられ、集中治療室に入れられていた。家族三人で初めてお見舞いに行くことになり、「やっ」と母に会える！」と喜んでいた私に、思いもよらない言葉が発せられた。その言葉とは、

「ここへは小学生以下は入れません。病気がうつる危険があるので」というものだった。それはやっ」と母に会えると思っていた私の心を引き裂いた。私は一人廊下のいすに座って待っていた。とても心細かった。そして、とてもとても後悔していた。「なぜ、あの時、ちゃんと母の顔を見て『いつてらっしゃい』と言わなかったのだろう。」「まだ『おかえり』も言っていない。もっと毎日の会話を大切にすればよかったのに。」母の顔を、見たくても見られない私はそんな事ばかり考えて、あふれる涙を止めることができなかった。

母と二人で寝ていた寝室では私一人になった。時計の針の音だけがカチカチと、広くなった寝室に響き、言いようのない不安が私を襲った。いつもなら隣にいるはずの母を思い、枕を濡らしながら眠る日が続いた。「ああ母がいたらどんなに良いだろう」とこれほど思ったことはなかった。

母が病気になり、会えることが少なくなってから気づいた事がたくさんある。それは「あたり前はあたり前ではない」ということ。そして「母はかけがえのない大切なもの」ということだ。その事に気づくと今まで母がいることがあたり前で、一緒にご飯を食べることがあたり前で、一緒に寝ることがあたり前で…。何もかもがあたり前だった日々がとても貴重なものに思えてきた。家族がいて、みんなが元気で、笑っている。こんなに貴重なことはないのだ。

このことに気づくことができたのは母の病気のおかげだ。おかげというのは変な言葉かもしれないが、私はこの大切な事を伝えるために母が病気になったのだと思った。このことに気づくことができた私は、むしろラッキーだ！と思うようになり、これからの私の生き方が変わるきっかけとなった。母にとつて「二度目の人生が始まった日」は、ある意味、私にとつても「二度目の生き方を始める日」となったのだ。

私は、母が今生きているから、母の病気を通して学んだことを生かすことができる。今まで、そこまで母の事を大切にしていなかった私に、もう一度チャンスが与えられた。私は、この与えられたチャンスを、これからの人生で最大限に生かしていきたいと思う。この、毎日の、いつもと変わらぬ生活の中に隠された、ありふれた幸せをかみしめて、一日の貴重な時間を大切にしようと思う。

今、母は元気に仕事に行っている。帰ってきたら、こんなささいな言葉を交わせる事に感謝し、心を込めて言おうと思う。あの日、言えなかった「おかえりなさい」を…。